【調査報告】

宍喰町八阪神社の祇園祭

高橋晋一

一　はじめに

本稿では、毎年七月一六・一七日に徳島県海部郡宍喰町の八阪神社で行われている「祇園祭」の概要を報告(1)するとともに、祇園祭を構成する要素（行事）の相互連関のあり方を検討する中から、その構造上の特質を明らかにしたい。

二　調査地の概要

（一）宍喰町の概況

海部郡宍喰町は徳島県の東南端に位置し、東は太平洋に面し、北は徳島県海部郡海部町・海南町、南および西は高知県安芸郡東洋町・馬路村・北川村と境を接している。

八阪神社の鎮座する大字久保は宍喰町の東部に位置している。近年宅地化が進んでいるが、周辺部ではキュウリやイチゴのハウス栽培が行われている。久保に隣接する大字宍喰浦は町の中心部で、農協、銀行など町の主たる施設が集中する。宍喰川河口の宍喰漁港を中心とした地域では漁業が営まれている。宍喰浦は三台のダンジリ・一台の関船を有し、祇園祭では重要な役割を果たす。

中世末期、宍喰には南北の両城があり、いずれも藤原姓の本木氏（宍喰の地を開拓した鷲住王の子孫と伝える）が城主であった。宍喰南城は愛宕山上にあり、城主は藤原朝臣本木孫六郎であった。宍喰北城は祇園山上にあり、城主藤原朝臣本木下野守持共は大永六年（一五二六）、一族の本木五郎左衛門信久とともに祇園社を造営（再建）したという［宍喰町教育委員会　一九八六ａ　一二九］。

（二）八阪神社について

八阪神社（**写真1**。通称「祇園さん」）は、宍喰町の東部、海部郡宍喰町大字久保字久保に鎮座する。祭神は健速須佐之男命・稲田比売命・八柱御

子神。旧社格は郷社で、神饌幣帛料供進社。氏子は宍喰町内全域の約千戸である。

八阪神社は、京都の八坂神社、広島県福山市鞆町の沼名前（ぬまくま）神社とともに「日本三祇園」の一つと称されている［宍喰町教育委員会　一九八六ｂ　一七四三］。創建年代は明らかでないが、鎌倉時代初期の建永元年（一二〇六）から建暦三年（一二一三）にかけて、真福寺の僧長慶により大般若経が奉納されている［宍喰町教育委員会　一九八六ｂ　一七四二］ことから、少なくともこの時代に祇園社が存在したことがわかる。

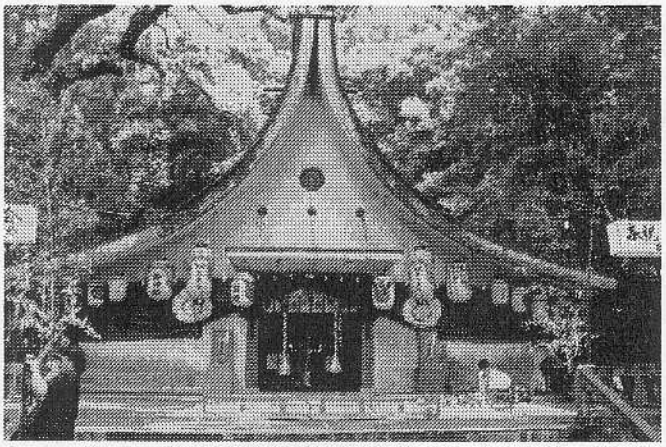

写真１　八阪神社

棟札によれば、大永六年（一五二六）に藤原朝臣本木下野守持共（祇園城主）が本木五郎左衛門信久とともに社殿を再建、さらに天文一七年（一五四八）には藤原孫六郎正信（愛宕城主）が社殿を再建した。現在の本殿は宝暦一〇年（一七六〇）の建造で、京都から一流の名匠を招いて造営したといい、その彫刻は精巧を極め美術的価値も高い。

神社は当初岡の山（鈴ヶ峯登山口の近く）にあったが、慶長元年（一五九六）に現在の社地（大字久保）に遷座した。当時の別当は真福寺であった。享保三年（一七一八）宗源宣旨をもって最高の神位である正一位を授けられ、正一位祇園牛頭天皇と称した。明治三年八阪神社と改称、同四年郷社となり同四〇年神饌幣帛料供進社に指定され、戦後まもなく宗教法人となった。

「祇園祭」と呼ばれる八阪神社の例祭は現在七月一六・一七日に行われているが、古くは旧暦六月七日から一四日までの八日間行われていたという［宍喰町教育委員会　一九八六ｂ　一七四四］。

祭りには山鉾（大山・小山の二台）、ダンジリ三台、関船一台が引き出される。特に山鉾は徳島県内で唯一、当社にのみ伝わるものである。八阪神社は古くから京都との関わりが深かった。宝暦一〇年（一七六〇）の社殿改築時には京都から一流の名匠を招いたといい、社宝の能面は春日登利の作と伝え、境内の狛犬は京都の法橋浄面の作とされる。山鉾もこうした京都との文化交流の中で導入されたものであろう。

三　祭祀組織

八阪神社は宍喰町全域の氏神（郷社）であり、その例祭である祇園祭も規模が大きいものとなっている。その運営にあたっては、さまざまな組織が役割を分担しあい、一つの祭りを形成している。

ここでは祇園祭を支える主な組織として、宍喰町祇園まつり振興会、氏子総代会、山鉾・ダンジリ・関船巡行に関わる組織、神輿巡幸に関わる組織、奉納舞（能舞）に関わる組織の概要について述べる。

（一）宍喰町祇園まつり振興会

前身は「宍喰町祇園まつり奉賛会」。宍喰町商工会・宍喰町観光協会・神社総代会（以上三団体が役員）のほか、山鉾・ダンジリ・関船の世話人、子供会の世話人、水産協会など、町内のほとんどの団体の代表で構成される。振興会は、祇園祭の日程や内容を検討するほか、宵宮の夜の奉納花火大会を主催したり、能舞組の衣装や太鼓の補修費を出すなど、祇園祭の維持・発展を支える組織となっている。

（二）氏子総代会

八阪神社の氏子総代会は、現在一九名の氏子総代から構成されている（うち総代長一名）。氏子総代は原則として宍喰町内の各大字より一名ずつ選出されるが、山鉾・ダンジリ・関船などを有し、祭りの中心的な役割を担う地区は選出人数が多くなっている。具体的には、大字久尾・大字船津・大字小谷・大字塩深・大字広岡・大字芥附・大字尾崎・大字日比原・大字宍喰浦字正梶・大字宍喰浦字那佐・大字宍喰浦字竹ヶ島より各一名、大字宍喰浦字久保（八阪神社の地元。山鉾を有する）より二名、大字宍喰浦字西町（ダンジリを有する。能舞を奉納する）・大字宍喰浦字浜崎（関船を有する。また神輿かきを担当する）より各三名が選出される。任期は二～三年（地区ごとに異なる）であるが、再選を妨げないため、実際には同じ人が長期にわたり氏子総代を務めているケースが多い。

氏子総代会は、神社および祭りの維持運営に関わる全体的な問題を合議し、また実施する組織である。氏子総代は、祭り当日は例大祭の神事への参加、神輿渡御への参加（金幣を奉じて神輿に付き従う）などの仕事がある。

（三）山鉾（大山・小山）巡行に関わる組織

山鉾（**写真2**）には大山・小山の二台がある。大山・小山ともに高さ約四m、幅約三mの箱形の形状をなし（材質はヒノキ）、下部には直径約七〇cm、厚さ約三〇cmの鉄製のゴマと呼ばれる車輪四個が付いている。山鉾は二階建ての構造となっており、上（二階部分）に人が乗ることができる。

大山の本柱は屋根の中央から突き出ており、その上に「御台」が取り付けられる。御台の四隅には榊が結びつけられ、そこから屋根の四隅まで紙垂の付いた注連縄が張られる(2)。御台の上には、口ひげを生やし、紅絹の一つ身の袷に青い袴を付け、右肩に天秤棒で水桶を担いだ桂（かつらおとこ）男と呼ばれる木製の人形（**写真3**）が立てられる。御台にはさらに長さ約二mの笹竹と紙製の御幣が結びつけられる。また、御台の下には、正面に八阪神社の神紋が入った緞子の幕が四方に張られる。

桂男の衣装は古くなるたびに海部町の川西地区から献上する習わしである［佐藤文哉　一九八二　一六八］。昔、川西地区に疫病が流行した際に桂男の装束を奉納したところ疫病が収まったことから、この習慣が始まったという［佐藤幸雄　一九二九　六三］。これは「災厄・疫病を除く」という

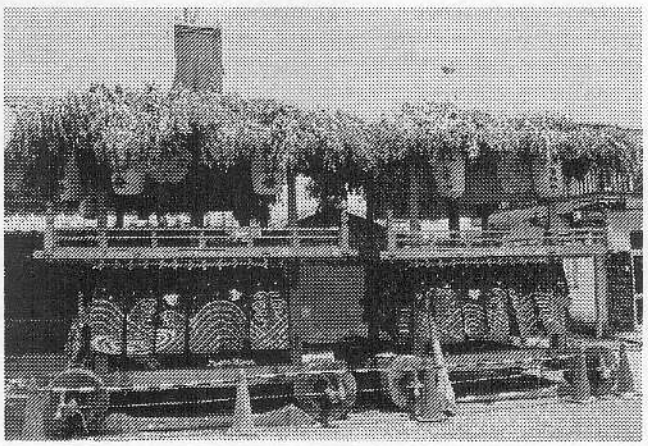

写真2　山鉾（大山・小山）

祇園信仰（祇園祭）の本質に関わって成立した習俗と考えることができる。桂男は現在は固定されているが、以前はぐるぐる回り、海の方角＝東に向けばその年は大漁であり、陸の方角＝西を向けば郷は豊作であると言い伝えていた［佐藤文哉　一九八二一六八］。

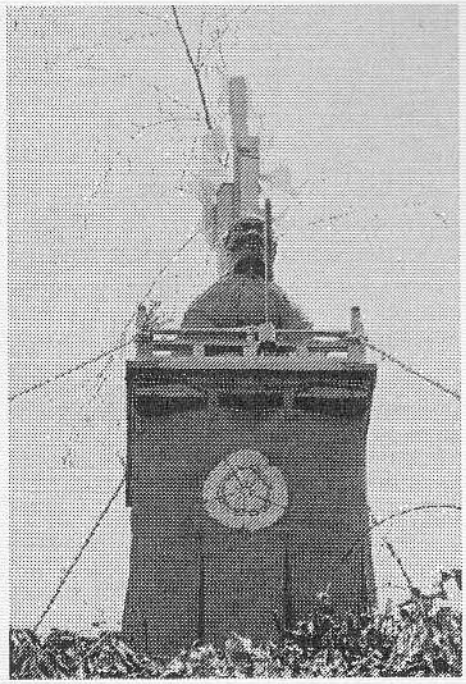

写真３　桂　男

小山の本柱も大山と同様、屋根の中央から少し突き出ており、その上部に金襴の布に包まれた長さ二mほどの木造の長刀を飾る。

大山・小山ともに神社の裏山から取ってきた青柴（椎や柏など）で屋根を葺く。二階部分には赤（大山）、紫（小山）の幕、一階部分（座より下の部分）には紺地に白で波や魚の模様をあしらった幕（大山・小山とも）を張る。二階部分の軒下には、「船津中」「小谷中」などと書かれた各地区から奉納された提灯が吊される。金具で大山と小山を前後に連結して引き出す。

山鉾の引き綱（大綱）は直径約二〇cm、長さ約二〇m（以前は約五〇mあった）の荒縄（藁綱）で、大山の前に取り付ける。大綱は毎年、宍喰町の日比原地区から奉納される。綱を作る際に掛けておくのにちょうどよい大きさの松があったため、日比原地区から奉納される習わしとなったと言われているが、その松は数年前に枯死してしまった。日比原地区では、氏神である井上神社の祭りの前日（七月二日）に氏子が集まり、神社の掃除とともに綱を打っている。しかし近年、コンバインの普及にともない藁があまり取れなくなり、現在の綱の長さは以前の半分程度（約二〇m）になり、半ば形式的なものになっている。現在は大綱だけでは足りず、長さ二〇mあまりのロープを二本加えて山鉾を引いている。

山鉾は正日のみ引き出され、久保四つ辻（宍喰町役場前の交差点）から本社まで、八阪神社の地元である久保地区の青年が引く。

（四）ダンジリ・関船巡行に関わる組織

現在、祇園祭には、金幣（きんぺい）仲、商人仲、鷲住（わしずみ）仲の三台のダンジリが引き出されている（写真４）。以前は金幣仲、商人仲、山仲、鍛冶（かじ）仲の四台のダンジリがあったが、山仲、鍛冶仲のダンジリは昭和四〇年頃に壊れて消滅した(3)。

八阪神社のダンジリは、県内のほとんどの祭礼にみられるような地域集団ではなく、職業集団によって運営されているのが大きな特色である。そのため隣家同士でも所属する組仲間は異なっている場合が多く、町内に

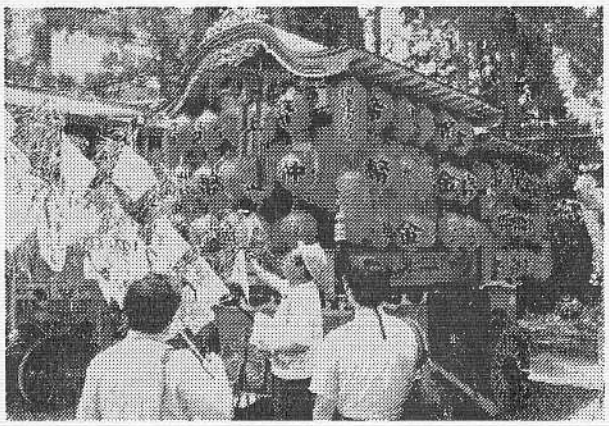

写真４　金幣仲のダンジリ

おける組仲間の分布は複雑に入り組んでいる。

金幣仲のダンジリは左官や大工をしていた家が中心で、大字宍喰浦西町の約三〇戸が所属している。金幣仲は以前は四三戸あったという［井ノ口　一九七九　九七］。当屋は金幣仲の名簿にしたがって（名簿の最初から）七軒ずつ、一年交代で奉仕している。以前は年二軒の当屋を決め、どちらが祇園の当屋か、八幡の当屋かを話し合って決めていた（八阪神社と八幡神社はいずれも宍喰町全戸が氏子となっており、二つの祭りに奉仕する必要がある）。当屋は昔は強制的に順番が決まっていたが、その後、家が大きくてできる家がする［井ノ口　一九七九　九七］ようになり、さらに現在のような形になった。

商人仲のダンジリは商人が中心で、西町を中心とした約三〇戸が所属している。以前は四〇戸ほどが所属していた［井ノ口　一九七九　九七］。現在当屋はなく、ダンジリ責任者一名が毎年お世話をしているが、以前は二、三軒が当屋となり、祭りの世話をしていた。当屋の回る順番はだいたい決まっていた［井ノ口　一九七九　九六］。

鷲住仲のダンジリは昭和六三年に「ふるさと創生資金」によって新たに作られた。かつてダンジリを有していた山仲（農業従事者の仲間）と鍛冶仲（鍛冶屋の仲間）が運営している。鷲住仲の名称は、宍喰の開祖とされる鷲住王の名を取って宍喰町祇園まつり奉賛会で決定したものである。鷲住仲には現在四八戸が所属しているが、居住地は主に西町に集中している。当屋は鷲住仲を四つの組に分け一年交代で回しており、当屋に当たった家は一年間八阪神社と八幡神社の祭りのお世話をする。

関船（**写真5**）は宍喰浦浜地区（字浜崎の約二〇〇戸、いずれも漁師）の担当で、漁協青年部が運営の中心となっている。現在、関船の当屋はないが、戦前には「関船当屋」があったようである［佐藤幸雄　一九二九六四］。現在の関船は昭和三〇年頃に造られたものであるという［井ノ口　一九七九　九七］。

山仲（山仲間）は多いときには六〇戸、少ないときで四〇戸くらいあった［井ノ口　一九七九　九四］。山仲に入っている人の帳面があって、近いところから順番に祇園・八幡のそれぞれの祭りに二軒ずつ（戦前は一軒ずつ）当屋を出した［井ノ口　一九七九　九四～九六］。

鍛冶仲は最盛期は四〇戸を超えていたが、昭和四〇年頃ダンジリが壊れて引き出せなくなったことを機に組もなくなった［井ノ口　一九七九　九六］。当屋は交代制で、隣り合った二軒が抽選で選ばれた。八幡祭り（大字久保の八幡神社例祭）が終わった次の日に打ち上げをし、次年度の祇園と八幡の当屋を決めた。

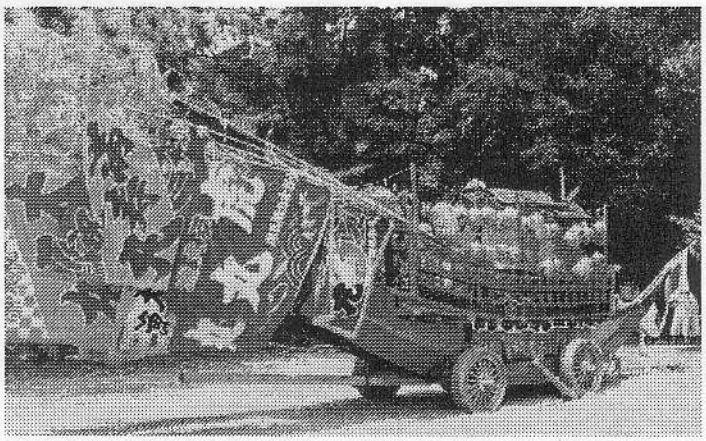

写真5　関　船

かつては各組仲間の中で、若い衆―若者頭―宿老―長老といった年齢階梯的な運営組織があり、年長者が年少者を監督する体制ができていた。現在でも、若い衆のまとめ役として若者頭を置いている組仲間は少なくない。山仲では二六、七歳で若い衆を率いる若者頭になった。結婚したらやめたり宿老となり、六〇歳前後で長老になった［井ノ口　一九七九　九六］。鍛冶仲では年齢が二四、五歳以上の人で所帯持ちを若者頭に選んでいた。若

者頭の上が宿老（二人）で、若い衆の監督をした［井ノ口　一九七九　九六］。商人仲では、若い者頭は組内で年の順送りになっていて、任期は決まっていない［井ノ口　一九七九　九七］。

（五）神輿巡行に関わる組織

神輿は浜地区（漁協青年部）の男性一四名でかく。選出方法は特に決まっておらず、適当な人に神社総代が頼みに行く。以前は浜地区（漁協）の未婚青年八名でかいていた。かつてかき手は七日間海に入り斎戒沐浴したという［徳島県教育委員会　一九七九　三八］。

神輿の御旅所渡御は、以前は宵宮の二二時頃より行われていたが、現在は本祭の日の一三時三〇分頃より行われる。渡御の行列には、先槍（後述する能舞組に属する子供二名）、唐櫃（鏡餅を納める。久保地区の神社付近の農家五、六軒の中から二名が選ばれる）、矛（二名。氏子の中から選ばれる）、天狗（漁協青年部の一番背の高い青年一名）、神輿、神職、八つ橋（能舞組に属する子供一名）、獅子舞（能舞組に属する子供一名）、囃子方（能舞組に属する子供五名）、カセットテープ（一名。能舞組の囃子のテープを流す）、金幣（氏子総代十数名）が付き従う。

（六）奉納舞（能舞）に関わる組織

能舞組（現在は「お能保存会」と呼ばれる保存会組織になっている）は神輿の御旅所渡御の前、および山鉾が神社に戻った時に、神社拝殿前の舞台で能舞を奉納する。能舞組は神輿の巡幸にも付き従い、楽を奏する。

能舞組は、宍喰浦西町の子供（男子小学生）九名で構成される。奉納舞の担当者四名（先槍二名、八つ橋一名、獅子舞一名）と、囃子方五名（太鼓二名、大鼓一名、鼓二名）からなる。本来は囃子方としてさらに横笛二名、謡人二名（いずれも大人の男性）が加わるが、横笛と謡人は近年担当する者がいないため、録音テープで代用している。

能舞組の指導は、現在西町の大人（主として建築士（大工仲間）の代表五名）が指導に当たっている［徳島県教育委員会　一九九八　七一］。練習は祭りの二週間ほど前から地区の公民館で行われる。一年目の子供は六月から練習を始める。能舞組の子供は、三年続けて奉仕することになっている［中島　一九六九　六六］。

奉納舞は先槍の舞、八つ橋の舞、獅子舞の三つの舞からなる。

①先槍の舞（露払い）（写真6）　折烏帽子をかぶり、打裂羽織・足袋をつけた子供二人が紅白の短冊を付けた笹竹を振りながら囃子に合わせて舞う。その間、次のような謡（歌詞）が三回歌われる。

「老いせぬや、老いせぬや、薬の名をも菊の水、盃も浮かみ出でて、友に逢うぞ嬉しき、この友に逢うぞ嬉しき」。

これは謡曲「猩々」の中の文句である。不老長寿の薬である菊の水（酒）を月夜に友と逢って交わすのは嬉しいと

写真6　先槍の舞

の意味で、神前に集い、酒を酌み交わして狩に行く様を表したものであるという［宍喰町教育委員会　一九八六ｂ　一八二七］。かけ声として「ヤーアイ、ヨーイ、イーヤー、オーハー」の句で結んでいる。

写真７　八つ橋の舞

囃子方が奏する囃子のことを「祇園囃子」と呼んでいる。囃子方はいずれも編み笠をかぶり、袴・打裂羽織・袴・足袋を身につけている。横笛と謡人は袴・羽織・袴・足袋といういでたちである。

②八つ橋の舞（**写真７**）　烏帽子・狩衣・紫の袴・足袋を身につけ、小さな太鼓とバチを持った子供一人が囃子に合わせて舞う。猟師が神前で酒を酌み交わした後、狩に出かける様子を演じているといい、その間、先の謡（歌詞）が五回歌われる。

③獅子舞（**写真８**）　獅子頭（普通の獅子頭と異なり、当地で射殺したと伝える赤みの毛で作り、口は開いた末広二本を用い、目などもなく、粗造のものである）をかぶり、青い着物・牡丹の模様のついた振袖・赤い袴・足袋を身につけた子供一人が囃子に合わせて舞う。獅子が林の中で暴れる姿、猟師に撃たれて狂い死ぬ様が表現されている。その間、先の謡（歌詞）が七回歌われる。

このように、現在演じられている能舞は、先槍（露払い）を連れた八つ橋なる猟師が獅子を撃ちに行く物語を能舞に仕立てたものである。この舞の背景には、宍喰町大字小谷の「赤みが谷」を舞台とする怪獣赤みの伝説がある。そのあらすじはおおよそ次のようなものである。

昔、小谷の赤みが谷に「赤み」と呼ばれる怪獣（猿の一種とも言う）が住んでいた。里へ出ては田畑を荒らし、赤ん坊をさらっていくので、里人は大変困っていた。髭の仁作という猟師（小谷の森清次の祖先であるという［佐藤幸雄　一九二九　六五］）は、赤みを撃ち取る機会をねらっていた。ある日猟犬を連れて猟に出たところ、山中に赤みの足跡を発見した。猟犬が吠える先を見ると、赤い毛が全身に生えた人間の体ほどの怪物・赤みを見つけた。鉄砲を撃つと赤みは驚いて逃げ出したので、仁作は猟犬とともに赤みの後を追った。日比宇川まで追いつめると赤みは川に飛び込んだ。赤みが川の中の岩に這い上がると犬も続いて飛び乗り格闘になった。仁作は川に飛び込むと鉄砲で撃って赤みを殺した。今もその岩の上にそのときの犬の足跡が残っているという［中島　一九六九　六五～六六］。

写真８　獅子舞

赤みの毛はふさふさとして見事なもので、その毛で獅子頭(4)を作り八阪神社に奉納したという。神社では仁作の勇気をたたえて能舞に仕組み、神歌の千歳に猩々の狂言を加えて現在の能舞を作ったのではないかと中島源は推測している［中島　一九六九　六六］。

本社には翁・千歳・三番叟の三面が社宝として伝わっており、能楽の源流である翁猿楽が演じられていたことも考えられる［中島　一九六九　六四］。翁猿楽は平安時代に始まり、鎌倉時代に現在の形式が定められ、室町時代に神道と結びついて神歌と唱えられるようになったとされ［中島　一九六九　六四］、露払（後に千歳と呼んだ）・翁・三番申楽の三つの舞で構成されるものである。

なお、社宝の三面は春日の作といわれている。能面作者の春日登利の作とすると室町以前のもので、相当古くから能舞が舞われていたものと考えられる［中島　一九六九　六三］。

四　祭りの過程

（一）準備

例年、祭りの約一ヵ月前（六月中旬）に大字久保字松本の観光物産センター（宍喰町商工会本部）で宍喰町祇園まつり振興会の会合が開かれ、その年の祭りの日程や予算案（宵宮の夜に行われる奉納花火大会の費用を含む）が検討される。

山鉾・ダンジリ・関船を有する地区や組仲間では、必要に応じて祭りの実際の運営（巡行の具体的なスケジュールや、山鉾・ダンジリ・関船巡行の際の人員配置など）についての話し合いが持たれる。山鉾を出す久保地区では、祭りの一週間前に祭りに参加するほとんどの人が集まり、ハナデッコウ（テコで山鉾の方向転換をする役）四名、テッコウカシラ一名、練頭一名が決められる。

山鉾（大山・小山）の組み立ては、七月一四日の朝八時から八阪神社の境内で行われる。作業は久保以西（郷分）の各大字の当屋各二名（大字内での輪番）が参集して当たる。

境内東側の倉庫から山鉾の部品を取り出し、久保地区の組み立て責任者を中心に、約二時間半かけて組み立てる。作業は柱立て、アバラ組み、舞台敷き、屋根組み、屋根葺きといった行程からなる。最後に大山と小山を金属製の部品で結合させれば完成である。

かつては、久保・日比原・馳馬・八山の人が八阪神社の境内で大山を組み立てる、中谷が綱を作り、久尾がテコを二本ずつ作る、船津・小谷・塩深・角坂の人が大山の屋根を神社の裏の森から取ってきた柴で葺くといった、地区ごとの役割分担があったようである［井ノ口　一九七九　九七～九八］。

組み上がった山鉾は、翌一五日に車で久保四つ辻（宍喰町役場前の交差点）まで引いて行き、飾り付けを行う。大山の上に桂男、小山の上に矛を載せ、大山・小山のそれぞれの周囲に提灯・幕を飾り、祭り当日までその場に据え置く。昔は旧暦六月一日に宍喰城正門の土居の門前に据えていたという［宍喰町教育委員会　一九八六ｂ　一七四四］。佐藤幸雄によれば、山鉾は「十五日夜、大字宍喰浦愛宕山下土居の門まで曳き廻は」［佐藤幸雄　一九二九　六三］していたと言い、少なくとも戦前まで山鉾は愛宕山下を出発点としていたことがわかる。

金幣仲のダンジリは、一五日に（大山・小山が移動した後）五、六人で

八阪神社境内にある倉庫から引き出し、飾り付けをする。提灯・幕・笹竹を飾り付けた後、久保四つ辻の南三〇ｍほどの地点まで引いていき、据え置く。以前は宵宮の日の朝に当屋の家（できないときは役員の家）の前で組み立て、一五時頃に八阪神社に持っていき、境内の適当なところに据え置いていた［井ノ口　一九七九　九七］。

鷲住仲のダンジリは一五日に八幡神社境内の倉庫から引き出され、同日に飾り付けをし、久保四つ辻の南一〇ｍほどの位置に据え置かれる。

商人仲のダンジリは一五日に八幡神社境内の倉庫から引き出され、字浜崎の蛭子神社の北隣に据え置かれる。飾り付けも一五日に行われる。以前は一三日前後に当屋の近くにダンジリを出し、洗って掃除をした。宵宮の一六時頃に八阪神社に引いていった［井ノ口　一九七九　九六］。

山仲（現在は消滅し、旧鍛冶仲とともに鷲住仲を形成）では、宵宮の前にダンジリを当屋の所に持っていき、飾り付けをした［井ノ口　一九七九　九六］。ダンジリを八阪神社に持っていくとき、組内を回り、お花をもらった［井ノ口　一九七九　九六］。

鍛冶仲（現在は消滅し、旧山仲とともに鷲住仲を形成）は、祭りの二日くらい前にダンジリを倉庫から出してきて、当屋の近くの車の通れるようなところで若い衆が飾り付けをした［井ノ口　一九七九　九七］。当屋から鍛冶仲の家を回り、お花を集めて神社境内に行った［井ノ口　一九七九　九七］。

関船は一三日に八幡神社境内の倉庫から引き出され、字浜崎の蛭子神社の東隣に据え置かれる。飾り付けは一五日に行われる。笹竹（孟宗竹）を関船の舳先に一本、艫に二本結びつける。笹竹には、お花をもらった人の名前を半紙に書いたものを結びつける。船の両舷には波を描いた幕を結びつけ、屋根に提灯を飾る。

八阪神社のお膝元の久保地区からは当屋三軒（本当屋一軒、手伝い当屋二軒―本当屋の両隣の家がなる場合が多い）が選出され、祭りの準備に当たる。具体的には神社の幟を立てたり、下ろしたりする作業（七月一六日に神社境内に幟を立て、一八日に下ろす）、本祭の日の午前中および本祭終了後の山鉾関係者の打ち上げの世話、山鉾の引き手の飲み物の世話などをする。祭りの期間中、当屋の家の前には幟が立てられる。

神社境内（八阪神社、および御旅所となる蛭子神社）の飾り付けは、一六日に多田登宮司が行う。この仕事は戦前は久保地区の当屋の役目であった。

（二）宵宮

七月一六日は宵宮である。この日は一五時頃より、三台のダンジリと関船が移動を始める。ダンジリは八阪神社境内に、関船は祇園通りの阿佐海岸鉄道高架下付近にそれぞれ据え置かれる。

夜は、神社境内から久保四つ辻に至る県道（祇園通り）沿いに一〇〇軒あまりの露店が軒を連ねる。また宍喰川岸では、二〇時三〇分より宍喰町祇園まつり振興会主催の奉納花火大会が行われる。花火は一時間にわたって打ち上げられ、大勢の見物客でにぎわう。なお、花火大会は祇園祭の活性化（観光化）のために、戦後新たに始められたものである。

かつてはこの日の二二時頃から神輿の御旅所渡御が行われた。行列は本社を出て祇園通りを久保四つ辻まで進み、西町通り（長屋筋）を経て南町を通り浜崎の御旅所（蛭子神社）に至った。神輿はこの御旅所で一晩泊まり、翌日一三時頃、本町、西町通り（長屋筋）を経て本社に還御した［海部郡教育研究所　一九六七］。

宍喰では宵宮の晩、各家でごちそうを作り、親類縁者、知人、近隣の人に振る舞う習慣がある。神輿かきは家々で酒肴をいただき、ふらふらになりながら御旅所まで行き、神輿を納めて帰ったというが［佐藤文哉　一九八二　一六九］、昭和三四年以降、本祭の行事が寂しいので、その日に行事を集約させようという話になり、神輿渡御は翌一七日（正日）に行うようになっている。

ダンジリ・関船を出す組仲間は、昔は宵の日から当屋に集まって飲んでいたが［井ノ口　一九七九　九七］、組仲間での宴会は戦後、打ち上げと称して祭りの翌日に行うようになり、宵宮の宴会はなくなった。山仲では戦前は宵宮の晩、途中の中休みに子供と若い衆が当屋へ言ってごちそうを呼ばれた。戦後、祭りの次の日を「打ち上げ」と言って皆を呼ぶようになった［井ノ口　一九七九　九六］。

（三）正日（本祭）

翌一七日は正日（本祭）である。この日は例大祭の神事、神輿の御旅所渡御、ダンジリ・関船の巡行、山鉾の巡行、能舞組による奉納舞などさまざまな行事が行われる。

一〇時、浜地区の漁協関係者の手により、関船が八阪神社境内に移動する。これで境内には飾り付けの済んだ山鉾・ダンジリ・関船が勢揃いすることになる。境内における山鉾・ダンジリ・関船の配置は図1のようになっている。

正午より本社拝殿前の舞台で、能舞組による能舞の奉納、「宍喰ジャンボ太鼓」による祇園大太鼓（創作太鼓）の披露が行われ、その後、境内で宍喰町観光協会主催のもち投げが行われる。

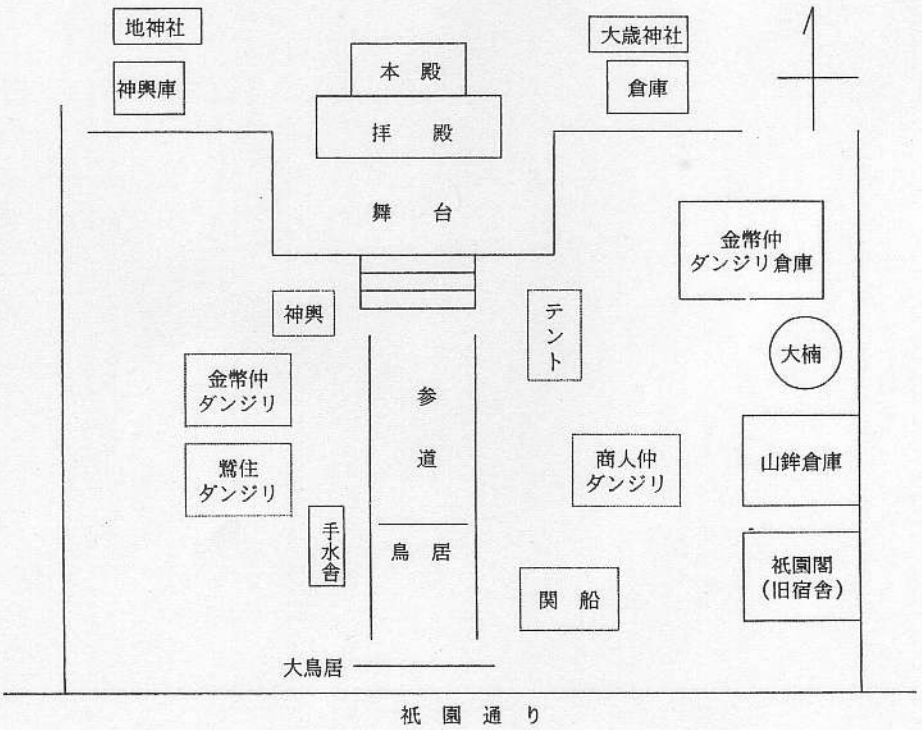

図1　八阪神社境内概略図

奉納舞はかつては八阪神社例祭の最後の儀として山鉾が神社に戻ってきたとき（深夜）に大山の台上で奉納されていたが、山鉾の大きさが次第に

縮小され台上の舞台が狭くなったため、さらに人手不足や時間的な配慮などの理由により、現在は神輿が神幸に出る前（正午頃）と山鉾が神社に入った後（一六時頃）の二回、本社拝殿前の舞台で演じられる形に変わっている。

宍喰ジャンボ太鼓は、宍喰町出身のプロゴルファー・尾崎将司（ジャンボ尾崎）が宍喰町の地域活性化のために大太鼓を寄贈したことをきっかけに結成されたグループである。現在のメンバーは約二〇名。当初、大阪で大太鼓演奏の指導を受け、平成二年より祇園祭で演奏を披露している

一三時、宮司、各地区の氏子総代、各地区・組仲間の当屋、神輿かき代表らが拝殿内に参進、例大祭の神事が行われる。神事は修祓、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠、徹饌、宮司一拝の順。

写真９　神輿の御旅所渡御

神事終了後、宮司は本殿より、拝殿の手前に据え置かれた神輿に御霊代を奉遷する。引き続き神輿の御旅所渡御。当地では神輿の御旅所渡御のことを「お浜出」と呼んでいるが、これは県南海岸部の祭礼（日和佐八幡神社、牟岐八幡神社、大里八幡神社など）に共通する呼称である。神輿が浜に近い御旅所（日和佐八幡神社のように、実際に海岸に臨時の御旅所を設けることもある）に赴くことから、こうした名称が付けられたものと思われる。

お浜出の行列の順序は先槍（能舞組の子供二名）、唐櫃（二名）、矛（二名）、天狗（一名）、神輿、宮司、八つ橋（能舞組の子供一名）、獅子舞（能舞組の子供一名）、囃子方（太鼓二名・鼓一名・小鼓二名。能舞組の子供が担当）、テープレコーダー（一名。能舞の囃子を録音したテープを流し続ける）の順で、金幣を奉じた氏子総代十数名が聖域を画するかのように細い縄（注連縄）で行列の周囲をぐるりと取り囲みながら進む。

先槍（露払い）は笹竹（紅白の短冊が結びつけられている）を左右に振り、道中を祓い浄めながら行列を先導する（**写真９**）。神輿は白装束に烏帽子姿の漁協青年部の男性一四名でかく。能舞組の囃子方は楽を奏しながら行列の最後尾を進む。横笛と謡については近年担当者がおらず、以前収録したカセットテープを流すことで代用している。

行列は八阪神社を出て祇園通りを久保四つ辻まで進み、西町通り（長屋筋）を経て南町を通り、三〇分ほどで御旅所（大字宍喰浦字浜崎の蛭子神社）に至る（**写真10**）（**図２**）。蛭子神社境内には二つの建物があるが、向かって左手が蛭子神社の社殿、右手が御旅所である。

写真10　神輿が御旅所に到着

神輿かきは御旅所の建物の中に神輿を据え置き、宮司はその前に台を置いて鏡餅などの神饌を供える。一同は境内の適当な場所に腰を下ろして小休止する。その間、宮司は御旅所に据え置かれた神輿に向かって御旅所祭の神事を行う。神事は修祓、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、徹饌、宮司一拝の順。

小休止の後、一同は再び列次を整え、神社に戻っていく。これを「お入り」と言う。このとき稚児行列（**写真11**）がお供をする。稚児行列は、戦前に行われていたシャリコ（子供が生まれてから三年間笹竹を持って神輿渡御に参加する習わし）に由来する。稚児行列の参加者は氏子の中から募集する。二〇〇人ほどの稚児が参加していた時期もあったというが、近年は少子化の影響もあり、参加者は二〇名くらいとなっている。稚児行列は、以前は神輿が御旅所を出る頃に神社から御旅所に向かい、再び神社に戻るという形で行われていたが、歩く距離が長すぎるというので、近年は御旅所から本社に戻る神輿渡御の行列に合流する形に変わった。

写真11　稚児行列

蛭子神社を出た行列は、本町を通り、西町通り、久保四つ辻、祇園通りを経て一五時頃に神社に帰還する（**図2**）。神職が御霊代を本殿に奉遷すると、一旦解散となる。

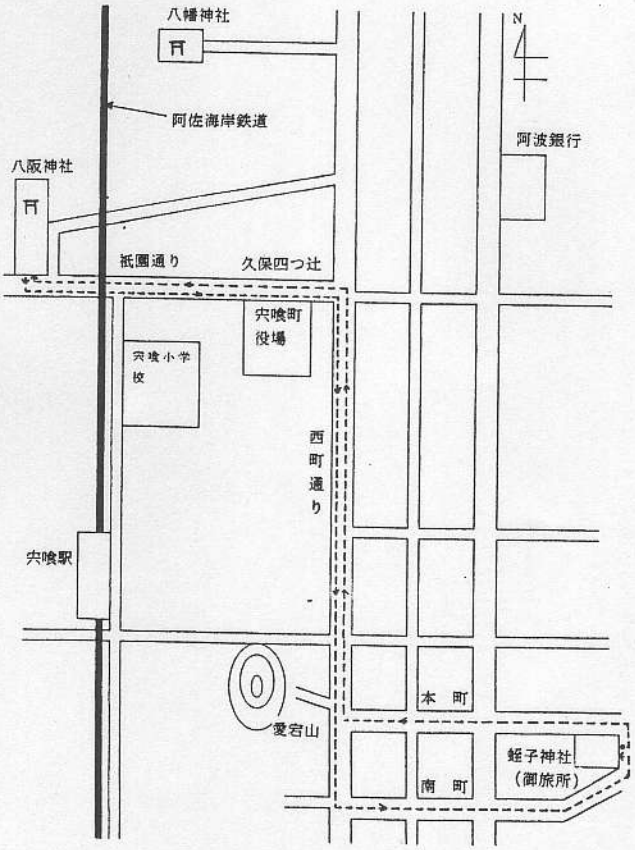

図2　神輿の巡幸ルート

ダンジリ・関船は神輿が御旅所に着いた頃（一四時頃）を見計らって神社を出発し、列次をなして浜崎の御旅所までゆっくりと進んでいく（**写真12**）。途中何度も休憩を取り、腰を下ろしては酒やジュースを飲む。ダンジリ・関船の運行の順序は、かつては山仲、金幣仲、商人仲、鍛冶仲、関船の順と決められていた［海部郡教育研究所　一九六七］。現在は金幣仲、商人仲、鷲住仲、関船の順である。

ダンジリの上には子供が乗り、太鼓と鉦でお囃子を入れる。現在は特に練習をすることもなく適当に叩いているが、以前はダンジリが出ていく際の「入りの太鼓」、帰る際の「出の太鼓」、さらにはお花をもらったときの太鼓など、叩き方にもいくつかの種類があった。

ダンジリの綱引きはそれぞれの組仲間に属する子供たちが当たるのが通例であったが、最近は大人の姿が目立つ。人手が足りない組仲間では、他

の組仲間に手伝いを頼むこともある。

昔は神輿が御旅所渡御に出る前、浜崎の御旅所に到着・出発する際、あるいは神職宅・関船当屋の家・お花をくれた家の前などで関船に乗った男性四、五人が船歌を歌った［佐藤幸雄　一九二九　六四］。

御旅所で小休止をした後（一六時過ぎ）、ダンジリ・関船は自由運行となる。ダンジリ・関船はそれぞれの組仲間の家の前を通り、お花（ご祝儀）やお酒をもらう。お花を渡すと、ダンジリ後部の笹竹の飾りに名前を書いた短冊（半紙）を吊してくれる(5)。また、お礼として切り分けられた鏡餅が渡される。巡行は二〇時頃まで続けられ、最後は神社境内の倉庫に戻る。　宵宮に神輿の御旅所渡御が行われていた頃も、やはり神輿が御旅所に着いた頃（二三時過ぎ）を見計らってダンジリ・関船が出発していた。御旅所に沿った街路まで引いていって、そこで休んだ。翌日は正午に神輿の還幸式（神輿が御旅所から本社に戻る）があり、ダンジリ・関船は夕方一七～一八時頃から関船・鍛冶仲・商人仲・金幣仲・山仲の順に引き出し、太鼓と鉦のお囃子を奏でながら、また青年は伊勢節を歌いながら、社頭を引き来たったという［佐藤幸雄　一九二九　六二］。

写真12　ダンジリ・関船の巡行

神輿が本社に還御したのを見計らって（一五時頃）、山鉾が久保四つ辻から神社に向けて出発する（**写真13**）。山鉾を引く久保地区の青年は顔に白粉と頬紅を塗り、振袖を着て女装しているが、これは戦時中、若者が悪ふざけをして自分の妻や彼女の着物を着て山鉾を引っ張ったことから始まったと言われている。戦前は山鉾の引き手は袴を身に着けていたという。

かつては能舞組の子供たちが大山の台上（二階部分）に乗り、小太鼓を打ち始め、先槍が大山の前で短冊の付いた笹竹を振り始めるのを合図に山鉾が出発した［佐藤文哉　一九八二　一七一］。大山の台上では能舞組が楽を奏し、舞を舞いながら神社まで巡行していたが［佐藤幸雄　一九二九　六三］、昭和五五年に山鉾の巡行ルート上（八阪神社のすぐ東側の県道の真上）にＪＲ（のち阿佐海岸鉄道となる）の高架線ができて以降、高架下を通過できるように大山・小山とも大きさを一回り小さくしたため、能舞組が大山に乗り込むこともなくなった。現在は楽を奏することもなく、静かな巡行である。

写真13　山鉾の巡行

山鉾は久保四つ辻から八阪神社までの直線距離にして一五〇ｍほどの道

を、途中何度も休息を入れながらゆっくりと進む。休憩のたびに腰を下ろして皆で酒を飲む。

山鉾は一六時頃に八阪神社境内に入ってくる。その後、拝殿前の舞台で能舞組による奉納舞（先槍の舞、八つ橋の舞、獅子舞の順）が行われ、祭りを締めくくる。山鉾の飾り（桂男・矛・幕・提灯）を外すと、久保の公民館に行き、打ち上げとなる。打ち上げの準備は久保地区の当屋が担当する。

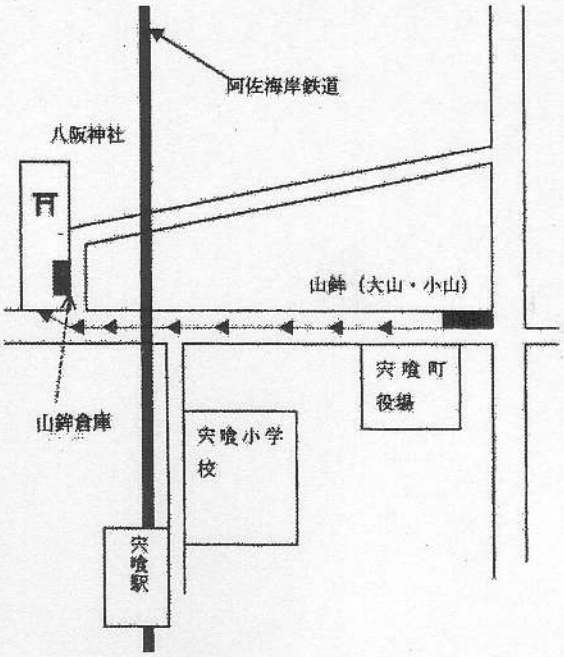

図３　山鉾の巡行ルート

山鉾の本体は祭りの翌日、久保地区の男性（一四、五名）が八阪神社境内で一時間半ほどかけて解体し、部品を神社境内の倉庫に収納する。

山鉾・ダンジリ・関船の組仲間では、祭りの翌日を「打ち上げ」と称して宴会をする習慣があるが、これは戦後になって始まったものであるという［井ノ口　一九七九　九六］。戦前までは宵宮の夜に当屋の家に集まって飲み食いしていた。

打ち上げは、以前はその年の当屋の家で行ったが、最近は当屋の負担が大きいというので、旅館や公民館で行うことが多くなった。

商人仲では打ち上げは当屋のうちの一軒に行って飲む。朝から神社に行き、神職から餅をもらってきて組仲間の各家で分ける。そのときにお花とゾウ（決まった金額がある）を集める［井ノ口　一九七九　九六］。商人仲では現在は旅館で打ち上げをしている。

戦後、山仲では祭りの次の日を打ち上げと言って皆を呼んだ。打ち上げの朝、神社へ行って二つ重ねの餅をもらってきて、当屋へ持っていく。組内の分だけ餅を切って、打ち上げをする前に一軒ずつ回ってお花をもらった［井ノ口　一九七九　九六］。鍛冶仲では当屋は打ち上げの日、子供や若い衆を集めて飲み食いさせた［井ノ口　一九七九　九六］。

五　祇園祭の構造

ここまで、八阪神社祇園祭の全体像を記述してきた。最後に、祇園祭の構成要素がどのように関連し合って一つの祭りを構成しているかを検討してみたい。

祇園祭の主な構成要素は、例大祭の神事、神輿の御旅所渡御、山鉾の巡行、ダンジリ・関船の巡行、能舞組による能舞の奉納である。通常、山鉾やダンジリ・関船などは神輿（神霊）のお供ということで、神輿巡幸の際に神輿に付き従って巡行することが多い。しかし八阪神社の祇園祭ではそのようなことはなく、神輿、山鉾、ダンジリ・関船の動きはそれぞれバラバラといった印象を受ける。

しかし、祇園祭の正日（一七日）のスケジュール（**表1**）を見ると、それぞれの動きが微妙な接点を持ちながらゆるやかに連動していることがわかる。まず大原則として、例大祭の神事→神輿巡幸→関船・ダンジリ巡行

↓山鉾巡行（能舞の奉納）という流れがあることを確認することができる。八阪神社の神霊を載せた神輿が氏子区域を巡幸し、その後を（時差はあるものの、神輿巡幸と同一のルートをたどり）ダンジリ・関船が巡行し、最後（これも時差はあるものの）祇園祭の象徴ともいうべき山鉾の巡行が行われ、能舞の奉納で幕を閉じる。

表１　現在の祇園祭のスケジュール（正日）

時刻	神職	神輿とそのお供	能舞組	ダンジリ・関船	山鉾
12:00			舞台で奉納		
13:00	例大祭の神事				
13:30		神社を出発	神社を出発		
14:00	御旅所祭の神事	御旅所に到着	御旅所に到着	神社を出発	
14:30		御旅所を出発	御旅所を出発		
15:00		神社に到着	神社に到着	御旅所に到着	久保四つ辻を出発
16:00			舞台で奉納	御旅所を出発（自由運行）	神社に到着

さらに詳しく見ると、神輿の動きを基準として、ダンジリ・関船の巡行、山鉾の巡行が開始されていることがわかる。神輿が御旅所に付いた時点でダンジリ・関船が神社を出発し、神輿が神社に帰還した時点で山鉾が久保四つ辻を出発して神社に向かう。これは、神輿巡幸の行列とダンジリ・関船の進み具合の違い、能舞組による能舞奉納のタイミング（山鉾が神社に入った時点で舞を奉納し祭りの幕を閉じる）などを計算に入れてのことのようである。

昭和三四年以前は、神輿の御旅所渡御は宵宮の夜に行われていた。以前の祭りのスケジュールは**表2**のようになっている。神輿は宵宮の二二時頃に神社を出発し、御旅所に向かう。神輿が御旅所に到着した頃を見計らってダンジリ・関船が御旅所に向かう。神輿、ダンジリ・関船は御旅所で一夜を明かす。翌日（正日）は、正午頃に神輿が御旅所を出発して神社に戻る。夕方よりダンジリ・関船が町内巡行に繰り出し、やや遅れて山鉾が愛宕山下より神社に向けて出発する。深夜、山鉾が神社に入り、能舞が社頭で奉納され、祭りは幕を閉じる。ここでもやはり、時差はあるものの、例大祭の神事→神輿巡幸→ダンジリ・関船の巡行→山鉾の巡行という流れは変わらない。山鉾がしんがりを務め、最後、神前での能舞奉納（大山の舞台上）で祭りの幕を閉じるということは、祇園祭における山鉾の重要性（優位性）を示しているものと思われる。

表２　戦前の祇園祭のスケジュール

宵宮

時刻	神職	神輿とそのお供	能舞組	ダンジリ・関船	山鉾
21:30	例大祭の神事				
22:00		神社を出発	神社を出発		
23:00	御旅所祭の神事	御旅所に到着	御旅所に到着	神社を出発	
0:00				御旅所に到着	

正日

時刻	神職	神輿とそのお供	能舞組	ダンジリ・関船	山鉾
12:00	還幸祭の神事	御旅所を出発	御旅所を出発		
13:00		神社に到着	神社に到着		
18:00				御旅所を出発（自由運行）	
20:00			愛宕山下を出発		愛宕山下を出発
23:00			神社で奉納		神社に到着

ここで注目したいのは山鉾の巡行ルートである。神輿とダンジリ・関船は、いずれも八阪神社を出発して御旅所に向かい、町内を巡行したのち最後は神社に戻る。しかしながら、山鉾は久保四つ辻（戦前は愛宕山下）から神社へという変則的なルートを取っている。このことは、祇園祭において山鉾という象徴がやや特殊な（神輿やダンジリ・関船とは遊離した）位置を与えられていることを意味するのではないだろうか。

この点に関連して興味深いのは、宍喰町大字久保に鎮座する八幡神社祭礼の構造である。八幡神社の氏子は宍喰町全域の約千戸（八阪神社と氏子が完全に重複している）で、九月二一・二二日に例祭が行われている。二二日（正日）は一〇時より拝

殿で例大祭の神事が行われ、その後神輿が御旅所渡御に出発する。行列の構成と巡幸のルートは八阪神社祭礼とまったく同じである。浜崎の御旅所（蛭子神社）に到着後、御旅所祭の神事を行い、神輿は八幡神社へ戻る。午後からダンジリ・関船が神社を出発し列次をなして御旅所（蛭子神社）に向かい、小休止の後、二〇時頃まで町内を自由に巡行する。

八阪神社の祇園祭と八幡神社祭礼の構造を比較してわかることは、八幡神社祭礼の構造に山鉾の巡行・能舞の奉納という二つの要素が付け加えられたものが祇園祭の構造であるということである。言い換えれば、八幡神社の祭りの構造は、山鉾が出ないこと、能舞組による能舞の奉納がないことを除き、八阪神社の祇園祭とまったく同一と言うことができるのである。

徳島県の南部海岸地方の旧郷社（日和佐町の八幡神社、海南町の八幡神社、牟岐町の八幡神社など）の祭礼は、宍喰の八幡神社祭礼とほぼ同一の構造を有している。すなわち、神輿の御旅所渡御（お浜出）に複数のダンジリ・関船が供奉するという形態を取る。要するに八阪神社の祇園祭は、県南海岸地方に共通して見られるこうした土着的な祭礼の構造に、山鉾巡行・能舞という（おそらく京都からの）外来的要素が融合した重層（複合）的構造を有しているということができるのである。山鉾巡行・能舞奉納という要素が祇園祭全体から見ると突出（遊離）しているような印象を受けるのは、それが伝統的な県南海岸地方の祭礼の構造から「はみだした部分」であることによるのである。

次に問題になるのは、こうした祇園祭の重層的構造がどのようにして形成されたのかという点であるが、この点については残念ながら検証の材料となる資料・史料に乏しい。先述したように、戦前まで山鉾は宍喰浦愛宕山下の宍喰南城（愛宕城）正門の土居の門前を出発点としていたという［宍喰町教育委員会　一九八六ｂ　一七四四］。祇園社は、中世には南北宍喰城主の崇敬が厚かった。棟札によれば大永六年（一五二六）に藤原朝臣本木下野守持共（宍喰北城＝祇園城主）が本木五郎左衛門信久とともに社殿を再建、天文一七年（一五四八）には藤原孫六郎正信（愛宕城主）が社殿を再建している。こうした城主の権力を支えるものとして、先進都市である京都から祇園祭が導入され、またその権力を目に見える形で象徴的に提示するため、山鉾を造り、その出発点を宍喰南城の正門としたという可能性も考えられるが、論証は今後の検討を待ちたい。

注

（1）本稿のもととなった調査は、平成一〇年六～七月、平成一四年七～九月にかけて行った。

（2）以前は、割り竹で直径一二〇㎝ほどの輪を作り、その中央に竹で十字に支えを張り、その輪に白木綿で作った暖簾のような幕を張ったものを本柱に嵌め、桂男の下部に結び付けて固定し、そこから屋根の四隅に注連縄を張っていた［佐藤幸雄　一九二九　六三］が、一五年ほど前より現在のようなやり方に変わっている。

（3）昭和四〇年頃に宍喰町から「ダンジリを動かすと道路（アスファルト）が傷む」とのクレームが付き、昭和五〇年頃までダンジリは引き出されなかった。山仲・鍛冶仲のダンジリはその一〇年の間に動かなくなり、消滅した［井ノ口　一九七九　九四～九七］。

（4）獅子頭はかつて大阪の職人に修繕に出したが、後で疑似の毛と取り替えられていることがわかり、現在は本物は本殿に納め、別の模造品を使っている［中島　一九六九　六三］。

（5）正日の午後、ダンジリ・関船が巡行に出るより前（宵宮の日や正日

の午前中など）にお花を持ってくる人もいる。このように事前にお花を出してくれた人の名前を記した短冊は、ダンジリ・関船の出発以前にすでにダンジリ・関船後部の笹竹に結びつけられている。

参考文献

井之口章次編　一九七九　『昭和五三年度　民俗採訪（徳島県海部郡宍喰町・静岡県磐田郡龍山村）』　國學院大學民俗学研究会

岡島隆夫　一九九七　『阿波の祭礼と神事（稿本）』　岡島隆夫

岡田一郎　一九七四　「宍喰町の寺社・石仏・遺跡の実態調査」阿波学会編『総合学術調査報告　宍喰町及びその周辺』　徳島県立図書館　一二九～一三六

海部郡教育研究所編　一九六七　『海部の祭』　海部郡教育研究所

佐藤文哉　一九八二　「徳島県南部における宗教儀礼と社会組織」石躍胤央・高橋啓編『徳島の研究六（方言・民俗篇）』　清文堂出版　一六三～二〇九

佐藤幸雄　一九二九　「阿波八坂神社の大山鉾」『民俗芸術』二―一二　六二～六五

宍喰町教育委員会編　一九八六a　『宍喰町史　上巻』　海部郡宍喰町

宍喰町教育委員会編　一九八六b　『宍喰町史　下巻』　海部郡宍喰町

高橋晋一　二〇〇二　「海を越えた京風文化―宍喰の祇園祭」『徳大広報』一〇八　徳島大学広報委員会　三六

徳島県教育委員会編　一九七九　『阿波の祭』　徳島県教育委員会

徳島県教育委員会編　一九九八　『徳島県の民俗芸能―徳島県民俗芸能緊急調査報告書』　徳島県教育委員会

中島源　一九六九　『宍喰風土記』　平和印刷所

湯浅良幸・岡島隆夫編　一九八六　『阿波の民俗一　年中行事』　徳島市立図書館

（〒七七〇―八五〇二　徳島市南常三島町一―一　徳島大学総合科学部）